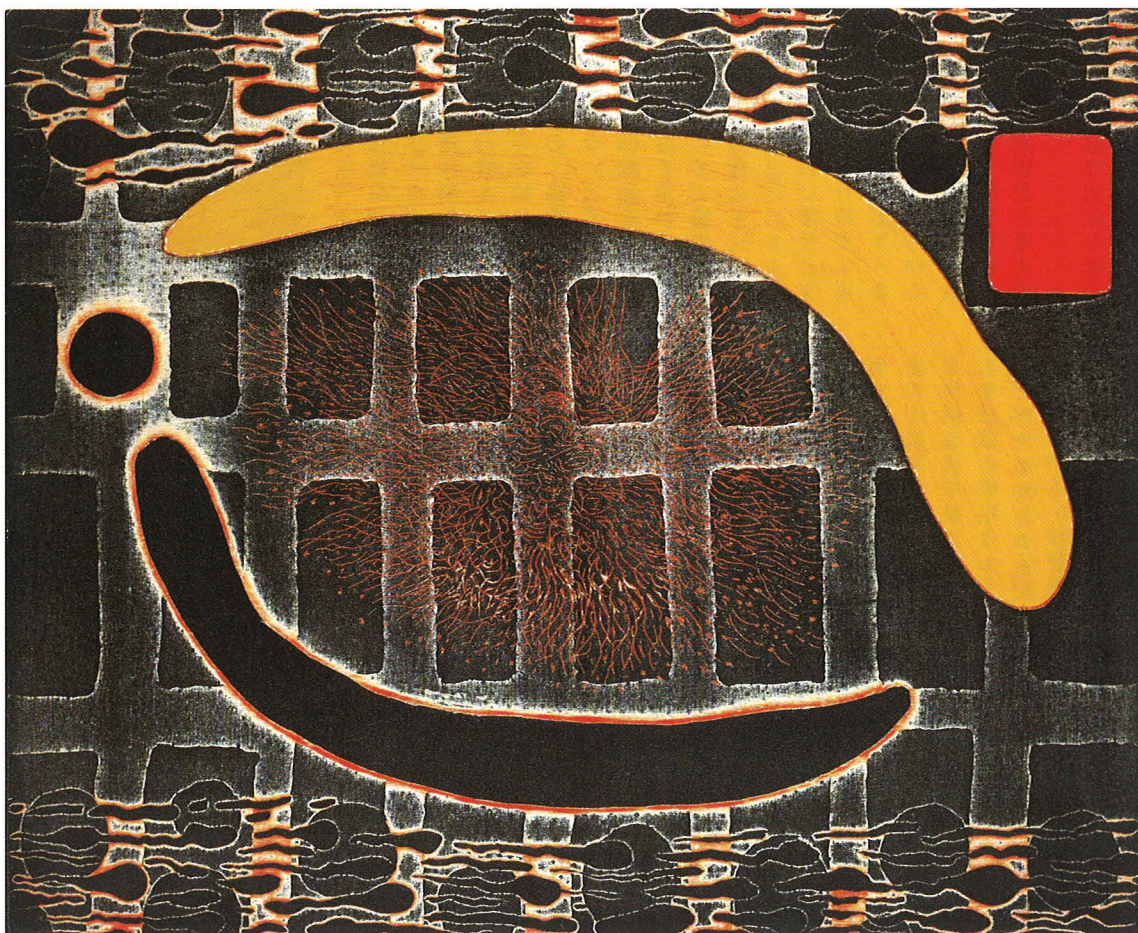


文化高知

'95年9月 NO.67



「アース・ワーム」 坂上貞宣

(財) 高知市文化振興事業団

ふるさと文化県

佐竹紀夫

文化行政を総合行政として推進していく、すなわち、県政の中にしっかりと定着させていくため新たに文化環境部が設けられて、はや五カ月余りがたちました。

これまで文化行政は、教育委員会の中で、芸術文化活動の推進や文化財の保護あるいは社会教育施設としての文化施設の整備を重点に、教育と結びつけて進められてきましたが、これからは、文化というキーワードを地域振興つまりまちづくりや地域づくりと結びつけることによって、新しい展開をめざしていこうということです。

このような行政戦略・手法を真に実効あるものとするためには、たて割りの行政組織においてハード・ソフトを問わず、様々な事業の中に文化や環境の視点・発想を導入し活かしていく取り組み、すなわち行政者一人ひとりの心の底を流れていくような意識の改革が必要です。

そこで早速、副知事をキャップとする「文化行政総合推進会議」や若手職員からなる「ワーキンググループ」など、全庁的推進体制を整えてきました。幅広分野から文化行政を捉え推進していくためには、何にも増して、県民との「協働」システムづくりが欠かせないと考え、文化活動やまちづくり活動家を中心とした「文化の県づくりを進める県民ネットワーク」を置いてご協力をいただきながら共に取り組んでいくことにしました。

これからの時代は、特に市民と文化団体・活動グループと行政が「協働」し、住んで誇りに思えるような地域の文化をつくるため、あらゆる事業や施策、施設の運営を文化行政と言えるものに改革し、新たな波を起こしていくことが大切だと考えています。

そこで、地域の視点で文化を考え、こんな文化のまちを創造していこう

という行動課題や方向性を捉えるため、去る七月、「流域の心は一つ」を合言葉に結束する四万十川地域を、市民参加によるアイデンティティづくりのモデルにしよう」と、「四万十川発自然と文化の共生するまちづくり」をテーマとして「第五回全国文化の見えるまちづくり政策研究フォーラム」を開催したところです。

積極的な活用を期待しています。紫陽花をじっと見つめていると実に無数の花びらが集まって咲いているのに気づきます。その花びらのように県内の五十三市町村の津々浦々には、様々な歴史的遺産や優れた自然景観、伝統的な文化、そして歩いていて新鮮な刺激・感動を覚えるようなまち並み、村のたたずまいなど地域固有の文化的な資源があります。

今後は、地域別に「文化を考える懇話会」を開催するなど地域の文化政策を市民、文化団体などと共に考える機会を拡大するとともに、文化行政の指針づくりを急ぎたいと思っています。

そのような都会の生活では触れることのできない言わば本県の真にオリジナルな文化、資源を磨き上げ新たな光をあてながら創造、蓄積し、全国に向けて発信していく、つまり文化軸を基底としたまちづくりや地域振興の発想が一層重要になってくるのではないのでしょうか。

また、文化庁など国や全国の先進地域の多種多様な文化情報のネットワークづくりを進めるため、高知県文化財団に「文化情報センター」を設置し、優れた地域との交流や県内外の文化団体、活動グループの交流機会づくりを支援していく方針です。

私達は、これまで指摘されてきた文化や環境に対する行政の行動、発想の硬直化を克服し、県・市町村、県民「協働」のもとで伝統文化、芸術文化を守り育むことはもとより、「木の文化県構想」や「四万十川の保全と創造」などを通じて、モデルとなる事例を積み重ねていくことで、新しい文化の風が吹いてくるであろうし、県下の遠近に七変化の紫陽花のような「ふるさと文化」の大輪の花の咲く日が訪れることを信じて疑わないのです。

このような取りくみと並行して、うるおいのある美しいまち、アメリニティのある楽しいまち、自然と歴史を大切にすまるといった、文化的な生活環境の整ったまち・むらを新たな行政の戦略として再生していくことが大切だと考え、景観、自然、建築、デザイン、芸術などの専門家で構成する「高知県文化環境アドバイザー会議」を設置しましたので、

（高知県文化環境部長）

達人たち

牧川史郎

NHKテレビの「小朝が参りました」という番組を面白く見ている。ご存じの方も多いと思うが、落語家の春風亭小朝と若い噺家を中心にしたトークショー形式の番組である。全国各地に会場を設営して、毎週、出演者とスタッフが現地の会場に出掛けて収録しているらしい。

その番組のなかに「百歳コーナー」というのがある。百歳を越える高齢者を会場に招き、進行役の小朝が、当人から長い人生の思い出話や長寿の秘訣を聞き出すという趣向である。さすがに、舞台の袖から中央に引っさらされた椅子席までの数メートルをひとりタッタと登場できるひとは少なく、誰かの介添えを必要とする。足腰の弱りや不自由は、年齢を考えあわせると仕方ないことだろう。それよりも、出演の依頼を受け、取材に応じたり、控室での打ち合わせに臨んだり、本番の

ためのそれなりの衣裳選びにもあれこれと苦労が伴ったに違いないことが推量されるので、そこへ登場しただけでも、見ている側としては拍手を送りたくなる。その心意気に脱帽してしまおうのである。

小朝のユーモアをまじえた質問に答える翁や媼たちの顔は晴れやかである。孫ほどの年恰好の落語家の、時にはぶしつけな質問にも笑顔をやさず、当意即妙な受け答えをする。その話しぶりは流暢とはいかないまでも、百年余を生きた自信にあふれている。中身には含蓄があり説得力がある。

面白いのは、翁や媼たちが青年期に抱いていた結婚観である。結婚に対する考え方が現代とはまるで違って、祝言を挙げるその日まで、伴侶となるべき相手の顔さえ知らなかった、というのはめずらしくない。恋愛結婚などは稀で、親の決めた縁

談を素直に受け入れるのは当たり前前というのが、当時の結婚形態の大方だったらしい。婚姻という大事にさえ、自分の意志を主張することなどままたまなかったのだ。そうやって結婚し、子供をつくり、家庭を築き、何十年と伴侶と連れ添い、気が付けば百年余を生きていたというのだ。言わば、この受容精神こそが長寿の秘訣であるのかも知れない。いや、人生の先達たちはそれを秘訣だなどとは思わない。時勢に、環境に、本然に逆らわず、ただひたすら川の流に身をまかせるようにして生きてきた、と述懐するに違いない。



を食べる、というのだ。そこには、長寿のための何かとあったらむずかしい理屈はなく、すべからく自然体であれ、と説いているのだ。「それとさ、馬鹿であることですよ。大馬鹿は早死にするけんどもす」と、百四歳の翁は同じ質問に答えていた。

私流に解釈すれば、自分が利口者であるなどとはさらさら考えず、むしろ馬鹿者を装い、時にはそれに徹し、神経をすりへらさなければならぬような場所からはなるべく遠ざかって生きること、の意と酌んだ。翁から見ればヒヨコのような私だが、そこに説かれていたことを自覚し、実践することはなかなかむずかしい。勿論、私もまた愚者のひとりには違いないけれど、とかく小利口ぶったり、知ったかぶりをしたりして、人前にシャシャリ出なければならぬことも少なくない。

番組に登場する長生きの名人たちは、それまでに何十遍となく繰り返されたであろう長寿の秘訣は、という質問に対して、おしなべて、クヨクヨしないこと、というのを挙げています。さらに、眠りたいときには眠り、食べたいときには腹八分目ほど

ともあれ、人生百年の達人たちが語る一言一句はそれぞれ示唆に富み、ヒヨコの私などを奮い立たせてくれる。自分があと何年生きられるか分からないけれど、時折、百歳の翁や媼たちの言葉を思い出しながら、あせらず、のんびりと生きてゆきたいものだと思う。「敬老の日」を前に、つらつらそんなことを考える。

（作家・大阪文学学校講師）

光と色のワンダーランド

佐藤公子

ノートルダム大聖堂の「バラ窓」からこぼれてくる、あの深い青や赤の美しいステンドグラスを見たことがあるだろうか？

十三世紀に作られた、あの美しい、ブルーの色ガラスは、有毒な金属酸化物が加えられていて現代では作ることができない、とよにかの本で読んだことがある。

ガラスのルーツは、現在のレバノンとイスラエルの国境地帯で、古代ローマ時代(紀元前一世紀の中頃)には、すでに建物の窓に木枠を用いて、ガラスをはめていたものがあつたとされている。

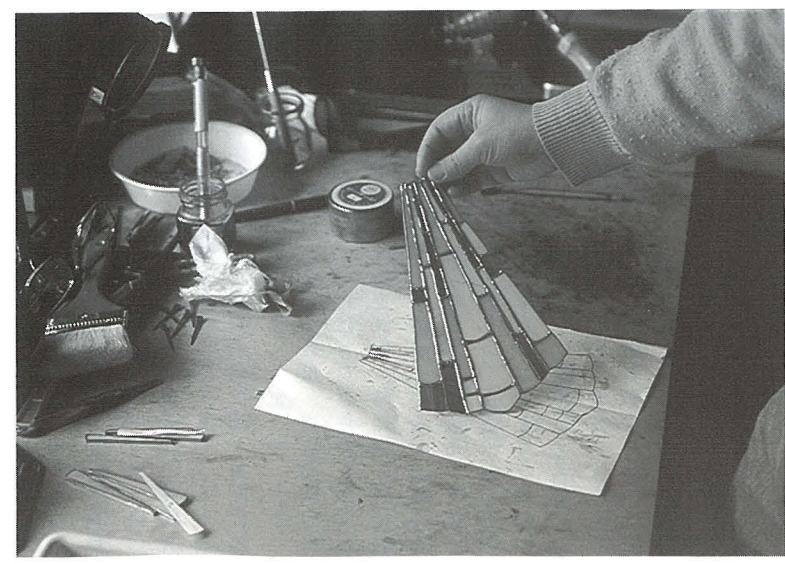
そこに伝わる伝説によると「その昔、天然ソーダを商う商人たちの船が、小さな川の河口に入ってきた。そして食事の用意をするために、彼

らは岸辺を見渡したが、大鍋を支えられるようなかまど用の石がなかなか見つからなかった。彼らは積み荷のソーダの塊を取りだして並べ、その上に鍋を載せた。このソーダの塊が熱せられて、砂浜の白い砂と合わさって、みたこともないある透明な液体が流れ出てきた。そして、これがガラスの起源になったのだ(『ガラスの話』由水常雄著 新潮選書)という。

鉄の管の先に溶けたガラスを水あめのように巻きとって、鉄管の別の端から息を吹き込んで風船のようにふくらませ、その球の先を切りひらいて鉄の管を回転させると遠心力で円盤状になるが、このビールびんの底のような円盤状のガラスを王者のガラス(クラウン・ガラス)と言ひ、

板ガラスの最初の形となる。おなじ火を使う工芸でも、陶器にはそこはかとなくあたたかみや愛着を感じる事ができるけれど、ガラスにはどことなくある距離感、なじめないなにかを感じていたが、それはガラスが科学の産物である、ということからきているかも知れない。ステンドグラスは、もともとキリスト教と深い関係にあったが、中世になるとますます結びつきが強くなり、ゴシック建築の大聖堂にとりいられ、太陽の光を神秘的な輝きに変えて、信仰や伝道のすばらしい手段となつていった。この時代のステンドグラスは、現在でも、イギリスのヨーク・ミンスターやフランスのサント・シャペルなどで見ることができ、いまでも色あせないで輝いている。

そして十九世紀になると、それまでヨーロッパの伝統的な美術だったステンドグラスが教会装飾からはなれて、建築家、デザイナー、工芸家など、幅広いひ

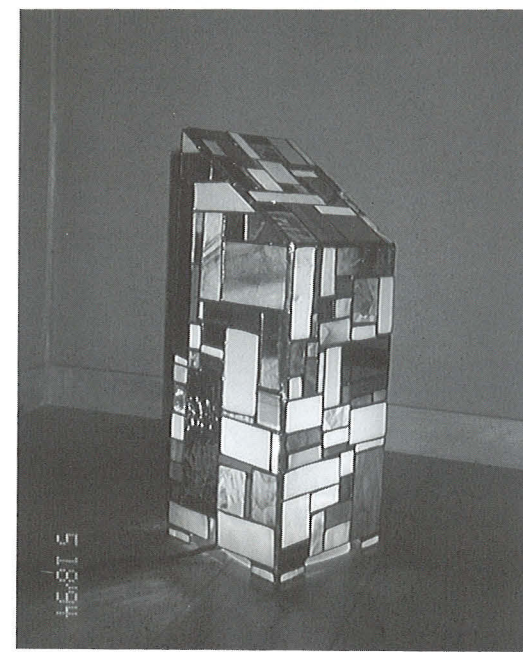


とたちによって一般家庭にも取り入れられるようになった。この時期アメリカでは、かの有名なニューヨーク5番街、ティファニー宝飾店創始者の息子であるルイス・ティファニーが、ガラスの世界の頂点にたつていた。彼は父親の宝飾店を継がず、父の富をバックに、今までの教会装飾などに使われてきたガラスには満足できず、納得のいく

ガラスを独自に製造し、またカップパーホル技法と呼ばれる銅製の粘着テープでガラス片を縁どりし、ハンダで留めながら組みあわせていくという新しい技法を開発し、ティファニー・ランプと呼ばれる新しいランプのスタイルを創り上げた。十四年前、私はフロリダ州の小さな街(ウインターパーク)のギャラリーで、偶然にティファニーのステンドグラスに出会った。ほの暗い部屋の中で、オリジナルのガラスでできた大きなパネルの前に立ったとき、やわらかな木漏れ日のひかりの森にいたような感じだった。アンティークのランプの前では、こんなランプを自分の部屋に飾りたい!と心から思った。本当に素晴らしい!と心から思った。しかし、オリジナル作品は、ほとんどが世界中の美術館や個人の所蔵になつていて手の出る代物ではなかった。

続いているし、ウインターパークでみたあのランプもレプリカを作り、いまでは我が家でなじんでいる。ステンドグラスに必要な道具としては、まずガラスカッター、ブレイキングブライアー(ガラスを割るペンのようなもの)、ガラスのざらざらした角を削るグラインダー、はんだごて等でそんなに数も多くなく、高価でもない。しかし、材料のステンドグラスの命でもある色ガラスは、数千種類あり、そのほとんどはアメリカ、ドイツ、フランスから輸入されていて高価であり、主婦の趣味としてはちょっと肩身が狭い気がする。作り方は、まずデザインに合わせて色ガラスを選び、型紙に合わせて

カットし、角を削ったあととカップパーテープを巻き、はんだ付けでガラスを留めていくという工程になる。ガラスカッターの使い方に慣れさえすれば、それほど難しくはなく、根気さえあれば最初から立派な作品を作ることが出来る。ガラスの種類や、色の組み合わせ方で、シックになったり、アンティークにもモダンにもなり、ガラス選びには、たっぷり時間をかけ、大いに悩むことになる。これから先、私の目標はモノトーンや同系色のガラスを多く使って、和風の家にも無理なく溶け込めるようなランプを作っていきたいと思っている。



日本でも、年を追ってステンドグラスが身近な存在となつており、今後ますます発展しそうな気配がある。地方にも、あちらこちらにガラス工房が出来て、今やガラスは鑑賞を楽しむだけの世界ではなく、生きてきており、陶芸や染織と同じ様に、ガラスも気軽に作られ始めている。心の豊かさが求められる時代、皆様もご自分の手で、光と色の世界を創りませんか。(ステンドグラス工房主宰)

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文薫・依光良三・川田勲・飯国芳明 著

A 5判・上製本・288頁
定価2,000円(本体1,942円)

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告
高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文薫・依光良三・川田勲・飯国芳明 著
危機に立たされる農林業、一層進む過疎化・高齢化のなかで、わが国のそして高知県の山村は、どう生きていけばいいか。国際的視野でも見る山村・農林業の現状と、その明るい未来を山村の再生への途を、現状の状況や農林業・林業の課題、日町村の実験分析のなかから展望する。

北海道の社会と文化を語る

久 檜 白

北海道の北見市から高知県に通い出して、もう十年近くになります。専門の地域社会学の調査のため、高知市や県西部の山村調査に、毎年一〜二度やって来ています。そのお蔭でたくさんの方の友人、知人を高知県に得ることができました。私は千葉県生まれですが、自然の豊かさや北海道の社会風土が肌に合ったのでしょいか、二十歳の時、札幌に渡って以来、三十五年間ずっと北海道に住んでいます。しかし、高知県に通っている間に、本州の文化と生活の感覚を多少取り戻すことができるようになり、最近では、北海道文化と本州文化を比較して見ることができるようにもなりました。

今日は、そうしたなかで見直した北海道社会と文化について軽く語ります。

高知市と北見市は姉妹都市になっており、毎年、若者や子供たちが交流を深めています。北見市の図書館には「高知コーナー」が設けてあります。この姉妹都市の「ゆえん」は「ご存じのごとく、坂本直寛先生の北光社が和人として最初に野付牛（北見市の前身）に開拓の鋏を入れたことによりです。初期の北海道開拓では、屯田兵による開拓が有名ですが、北光社あるいは本願寺開拓など宗教

団体によるもの、私設の開拓社によるもの等、民間の開拓も活躍します。どの町にも寺が二、三集まった「寺町」がありますが、開墾をしながら人々の心を癒していたのでしよう。さらに忘れてはならない開拓団に「士族開拓」があります。維新で敗れたり、役割を終った士族が、まとまって北海道に入ってきた。札幌周辺には伊達、白石など東北地方の旧藩ゆかりの地名が今も残っています。また道南の八雲町には、徳川の農場もありました。

さて、屯田開拓ですが、北海道中央、北部、東部に北方警備を目的とした兵士が、明治八年から配置されます。彼らは、家族と共に、「屯田兵村」を作り、開拓も兼ねてその任についていました。そういう意味では日本最後の「農兵」ということになります。札幌、空知、旭川、北見地方に〇〇屯田とか、屯田〇区とかの地名が残っています。日露戦争を前に、屯田兵制度は、正式な兵役制度に移行して無くなりませんが、多くの兵士と家族はこの地に残り、後に開拓の功績を残した「人と家」となります。北見市でも、俗に「屯田一族」と呼ばれる名士を数多く生み出しています。

民間や明治政府の力で明治以後の



摩周湖

和人による北海道開拓は始まるのですが、もともと北海道の先住者は、アイヌ民族の諸氏でした。和人の北海道開拓は、この先住者であるアイヌ民族を少数者に追い込んでしまい、アイヌ文化から積極的に学ぼうとはしませんでした。この点が北海道開拓の最大の間違いです。アイヌ民族は、自然との共生の素晴らしい文化を持っていました。しかも彼らは、アムール河流域からサハリン、さらに千島列島に居住していた北方諸民族と文化的交流をもっていました。中国の錦などが、北方民族との交易で

アイヌ民族の手に入ってきています。明治以後の北海道開拓は、このようなアイヌ文化から学ぶこともなく、また、積極的に残す努力も怠ったため、その後の北海道文化には、自然と人間の共生をうたった文化が乏しいのです。高知県や九州に行くと神楽の舞や祭り、山の食文化を見て、北海道のアイヌ文化に通じるものが非常に多いように思います。

高知県の某村の人々が、北海道に研修旅行に来ました。三日間、彼らに同行しましたが、非常にまじめな研修で、現地の人々と積極的に交流し、自分の村のために学ぶことは何かと必死に勉強していききました。こういう研修だったら村費を使っても決して無駄なことではないと思います。二十数人の村ビトは、最後に一人ずつ感想を述べ合いました。二つ、重要な指摘がありました。

一つは地域性が乏しいということ。女性の参加者からは料理に地域性が無いという指摘がなされました。決して高級ホテルに泊まったわけではなく、研修地の町営の保養センターのようなところに泊まったのですが、高知県人にマグロの刺身を出したりもしていません。北海道の「郷土感」は、非常に低いので

す。また、農業衰退の中で、北海道では土地を投げ売って一家を挙げて村を出ていく（挙家離村）が圧倒的に多いのに対し、他府県では、土地を手放し難く、兼業で農業を続け、何としても土地を放さないという相違になります。別の研修生は、北海道の人と話しても、自分の家と自分の家の農業のことは言うけど、村や地域のことは全然しゃべらないとも言っていました。人々の地域への土着性が薄いことによりです。もう一つ

は、「川が汚い」という指摘でした。研修者は、四万十川流域の村の人でしたが、北海道の二つの大河である天塩川と石狩川を眺めながら、研修地を移動して行きました。二つの大河はいずれも中流以下は、うす汚れた流れで、その原因は、都市の汚水の流入もありますが、多くは、山の土砂と水田・畑の土砂の流入です。特に、水田・畑、酪農の規模が大きくなるにつれて、その土壌が川に流れ込み、水を汚す原因となっています。北海道開拓は、このようにひたすら自然を切り開くことの百年でした。本州から移住した和人は、山も川も海のこととも考える余裕が無く、ただひたすら農業と工業を起すことに腐心している内に百年たってしまったわけですね。他府県が開発が決して、自然を大切にしてきたとは言えませんが、開発の優等生（特に農業）といわれる北海道は、自然との共生の視点に欠けていました。私は、この自然観も、先に指摘したアイヌ文化を和人が正しく学ばなかったことによるものと思っています。

三十五年間、住み続けている北海道文化を、やや否定することになりました。でも、先住者のアイヌ文化を否定した百年余の文化の歴史は、あまりにも蓄積が乏しすぎます。今、

新たに、先住者の文化を残し、そこから学ぶ活動も始まり、新しい北海道文化をつくる業は、これからの仕事になっていきます。北海道文化と社会は、別の言い方をすれば、形状の無い、流動性の高いものです。したがって、新しい文化は創造過程にあり、そこには優れたものがたくさんみられます。あまり伝統や因習に捉われない荒削りのものに、私の若い時代には魅力を感じたのですが、それだけでは最近では、やや不満を感じ始めています。高知県の文化と社会を見て、そのあたりに刺激を受けたようです。

高知県も、農村の荒廃をどう建てなおすかという深刻な課題を抱えています。特に、農山村の自然と神をうたう文化が、地域から人々が離れていくことによってその継承がきわめて難しくなっています。「あそここの集落のこの踊りは、もう踊らなくなってしまった」という話を、いくつも聞きました。文化の層が厚いだけに、集落の崩壊の動きと一体となっているこの問題には、なかなか手の施しようがないようです。文化は、刻々と変わり、新しいものが生まれていくものだと考えれば、いたしかたないことですが、やはり寂しさを感ずります。

（北見工業大学教授）



雄大な北海道の自然（釧路湿原）

オウム真理教事件の周辺 (下)

—オウムの子どもたち—

青木宏治

子どもをめぐる紛争

オウム真理教事件は検察がいくつかの事件の容疑者を起訴する一方で相変わらず警察、検察の捜査が続いている。この事件の犯罪の全体像は依然として不明な部分をたくさん残している。一連の過程でオウム真理教の教団施設で生活していた子どもたちが四月十四日に五三名、五月十六日以降のものを含めて児童相談所に一時保護された子どもたちは総計一〇一人となっている。四月十四日に教団施設からヘッドギアをつけた子どもたちが警察によって車に乗せられたり、その後、オウム真理教の親と称する人々が児童相談所に面会などを求めて抗議する様子が繰り返し報道された。警察が子どもたちを連れ出したり、児童相談所の一時保

護措置など普段、あまり知られてない事態を見てどうということなのか考えた人も少なくなかったようである。これは児童福祉法にもとづく措置として行われたものであるが、親子関係の切り方、子どもの保護の仕方として正しかったか、教団施設の宗教的親子関係への介入の正当事由と限界など、これまでの児童福祉法の措置との落差を感じる人が多い。そこでテーマとして児童福祉法とオウムの子どもを保護を取り上げる。

もう一つの子どもをめぐる紛争として子どもの監護権(義務)の争いがある。これはオウム真理教の親子に固有に発生した問題ではないが、前者と同様、宗教をめぐる親子、夫婦の関係に司法という国家がどのように、どの範囲で介入し、紛争を解決できるのか、重要な問題を提起して

いる。坂本堤弁護士をはじめ「オウム真理教被害対策弁護団」が取り組んできた問題でもある。子どもを連れて両親がオウム真理教に入信し教団道場などで、「修行」していたが片方の親が脱会し、子どもを教団施設から取り戻そうとする事例や子どもを連れて母親が「出家修行」に教団施設で生活するようになり父親が子どもの監護権を主張する事例などがある。なぜか、父親が子どもを連れ戻そうとする例が多いように思われる。

児童相談所の子ども保護とは

オウム真理教施設から警察官がオウムの子どもたちを連れ出し児童相談所に移動した措置は、児童福祉法二五条にもとづいてなされたことと報ぜられている。しかし、別掲のように

児童福祉法

第二五条 保護者のない児童又は保護者に監護させることが不適当であると認める児童を発見した者は、これを福祉事務所又は児童相談所に通告しなければならない。……

第三三条 ①児童相談所長は、必要があると認めるときは、第二六条第一項の措置をとるに至るまで、児童に一時保護を加え、又は適当な者に委託して、一時保護を加えさせることができる。……

子どもの監護権者は誰か

子どもの宗教も含めて監護養育は親権者が共同して行うことになっている(民法八二〇条)。親権者が子どもを連れて宗教施設で監護することは何ら法的介入を受ける筋合いはない。前述のように片方の親が一方的に子どもを連れて教団施設内の生活をすることとなった場合にいわれる子の奪い合い紛争といわれる事態が生じる。どちらが監護することが子どもの福祉、子どもの最善利益になるのかの判断が求められる。まずは親権者同士の協議が求められる。それでも決まらなければ家庭裁判所

の審判ということになる。その場合にもある宗教にもとづく監護をしているから監護に不適格であるということとは許されない。裁判所が親子関係、監護教育のあり方について宗教を考慮することは家族ブライバシー(自己決定)を侵すものであり、宗教の自由への不当な介入といえる。このようなこともあって子どもを監護する者の決定は宗教が関係する場合には難しい。また、結論が出るまでに時間もかかる。そこで子どもの保護の緊急性から緊急の仮処分による救済として人身保護法が活用される。親あるいは教団が子どもを「拘束」しているとしてそれからの解放、引き渡しを求めることになる。オウム真理教の教団施設で生活する親子について生活環境の安定性・継続性の欠如、生活環境の不良、家族単位でない生活環境、経済基盤の欠如、監護態勢の不安定、学校教育に対する配慮、修行・宗教教育による影響を挙げた例がある(大阪地裁平2・9・7「判例時報」一三六六号)。

親の子どもにたいする監護教育の内容について国が介入することは避けるべきであり、親の子どもへの宗教教育の自由は尊重されるべきであるが、子どもの宗教の自由も重要で

ある。子どもの人格的自由を守るために子どもへの宗教的働きかけ、活動について絶対的帰依を求めたり、マインドコントロールをしてはならないこと、長期の宗教的修行をしないこと、他との連絡・交流などが保障される必要がある。子どもの宗教の自由を守るルールが作られる時期にあるのではないか。(完)

人身保護法

第二条①法律上正当な手続によらないで、身体の自由を拘束されている者は、この法律の定めるところにより、その救済を請求することができる。

②何人も被拘束者のために、前項の請求をすることができる。

民法

第七六六条②子の利益のため必要があると認めるときは、家庭裁判所は、子の監護をすべき者を変更し、その他監護について相当な処分を命ずることができる。……

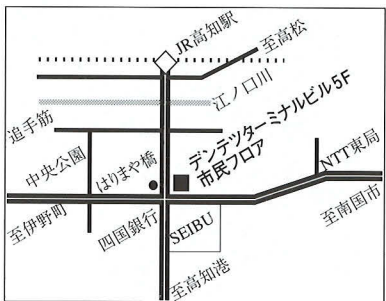
第八二〇条 親権を行う者は、子の監護及び教育をする権利を有し、義務を負う。

(高知大学人文学部教授)

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適!

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、
スポットライト完備
所在地 高知市はりまや町
一―五―一・デンテツ
ターミナルビル5階



申し込み (財)高知市文化振興事業団
☎73-14365

山のそば屋の繰り言

島田彰夫

街から来たお客さんが、盛りそば一枚食べて八〇〇円払って下さる。レオンチェフ(注1)流に言えば、本川村という高知の山麓に八〇〇円の最終需要が投入されたことになる。その先は、産業連関論ではおおよそこうなる。原価に当たる部分、そば粉の代価は街の粉屋さんを経てどこかの農家へ流れる。だし昆布は北海道かつお節は県内の海辺、しょう油は香川や熊本県、辛うじて干椎茸の代価だけが地元に残る。電気代やガス代は四国電力や経済連へ。利潤、私の生活費に充てられる部分はどこへ行くか。この村には水田が少ないので米は村外産。ご近所の方に野菜を時々いただく外は、地元農産物が村内を流通する仕組みがないから、副食の代価もほとんど弘化台へ流れる。

したがって、ここに投入された八〇〇円の最終需要は、干椎茸の外は、村内に二次需要を喚起しない。すなわち、そば切りという商品の産業連関は村内にはほとんど無くて、そば屋という私の仕事は、残念ながら、村のお役に立っていない。山間部で作られるあの固い豆腐の場合も同様である。大豆は経済連経由のアメリカ産ならば、地域内産業連関は無いに等しい。また、レオンチェフ本来の面目である公共投資による最終需要の創出

例として、一億円の林道工事を想定してみてもよい。重機は小松、トラックは日野、石油は日石、セメントは住友、砂利さえこの辺り吉野川水系は強度不足で使えない。労賃や地元土建業者の利潤などの貨幣所得は、都会並みの生活をし、街の文化を楽しみたいという訳で、簡単に都市部に回収される。ここにも地域内産業連関はほとんど無くて、山を傷め付けてはひたすら消耗する光景のように見える。レオンチェフを持ち出して、貨幣循環による産業的生活を勧めているのではない。それほどに、山が山村が貧しくなっていると云いたいのだ。そばや大豆、少し前まではたくさんあった素材が、山でこそ素晴らしい素材まで、地を払って無い。悲しいことだが、これが山村の現実なのである。

いつから、どうして、こんなことになったのか。山や畑の多様な利用(注2)によって土に直面して成り立っていた生活から、杉・檜の植林による貨幣を媒介にした生活へと、山の人々の重心が移された。その結果だろう。それはまた、明治以来の国策にも符合する。入会林を国有林に編入し



同様に、遅ればせながら、わが国の山村が産業社会に呑み込まれた姿でもある。

杉や檜のモノカルチャー・プランテーションの貨幣媒介生活は、モノカルチャーの言葉通り、豊かな文化でも生活でもあるまい。土を耕し、多様に利用して暮らすことこそ、豊かな文化の基層をなすはずである。

文化の原語であるカルチャーは、本来、「土を耕す」という意味であった。いつの頃からか、文化包丁や文化はえたときに続いてか、文化人や文化産業やらが横行するようになって、文化は劇場や美術館にあ

るものとされ、都市で消費し楽しむ毒にも薬にもならないものとなった。いや、そうではなくて、目には見えないように陰微で、しかも、大きな毒作用を発揮するものとなったと言わなければならない。山が貧し、山村が崩壊してゆく現代の状況の一翼を、文化と呼ばれるものが確かに担っている。私には見える。土を耕すという根源から、山から、田園から、海辺から、人々を引きはがすのに手を貸している。深沢七郎の檜山節考や、じゃが芋を食う人を描いたピカソでさえも、総じてのそのような作用の構成分子をなしていると思われる。山にも、

畑を耕すよりは絵を描いたり、花入れを焼いたりするのが文化的と思ふ人もいて、文化祭などというものがある。

有償でか無償でか、都会から偉い先生が審査にみえて、日展、県展、そして、という中央集権文化ヒエラルヒーの末端を育成し、絵の具や陶土を消費してがらくたに変えるのを奨励している。

モーツァルトに蘊蓄を傾けなければ仲間に入れてくれないのは一向に構わないけれど、小林秀雄大先生も「僕は馬鹿だから」と戦争責任について口をつぐんだのは知っておいてよい。文化と呼ばれるものが、いつ、どこで、どのようにして形成されてきた、どのような代物(注5)なのか。何に寄与し、何を圧殺し、誰がそれを食いものにして文化生活をしてきたのか。そして今は、と考える作業は省けまい。

学校という文化装置によって、貧農の家から都会に吸い出され、土を耕すのも忘れた私は、山に入った今も、術もなく、過ぎ来し方に憔悴たる思いをしながら、庭の草を引いている。草引きが文化と強がるのではないが、生活が即文化であるという



考え方がようやく日目の目を見る方向にあるのはうれしい。いつか、筋の通ったうまいそばが打てるかも知れない。(手打ちそば 時屋)

(注1) 森嶋通夫『産業連関論入門』

レオンチェフは共産圏からアメリカに出て活躍した計量経済学者

(注2) 内山節『時間についての十二章』岩波書店

大野晃『苦悩する現代山村』(文化高知)

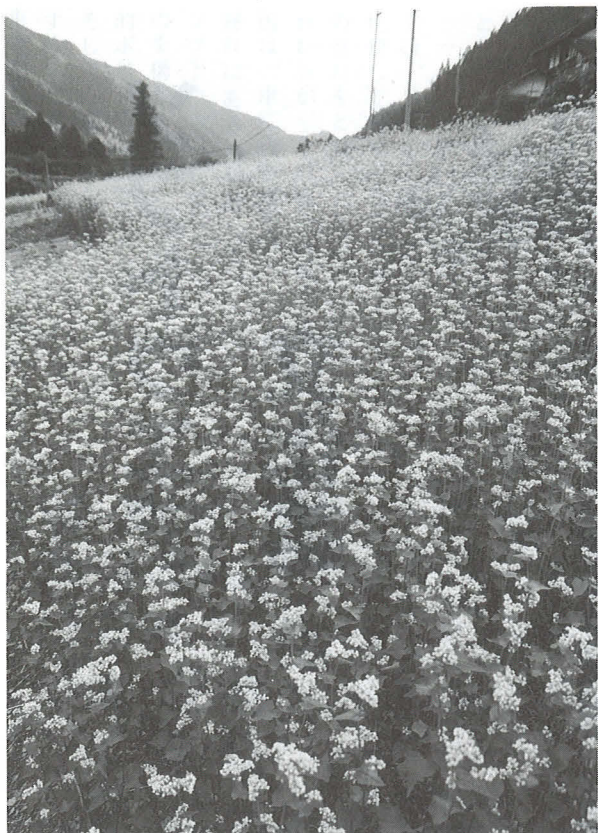
(注3) 丹羽邦男『土地問題の起源』平凡社

選書 (注4) 鍋島正稔前県森連会長『山よ高知新聞社』

「雑木林は……山持ちにしてみれば、一文の値打ちもない。」

(注5) ホルクハイマーとアドルノ『啓蒙の弁証法』岩波書店

ヴェルナー・ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』論創社



ソフトウェア

文化論 中



中谷 正彦

アルビントフラーの『第三の波』から十五年たった今、情報化社会の到来がやっとその緒についてきた感がある。いうまでもなく、情報化社会とはコンピュータの発展と共に唱えられ出したもので、一九四六年に真空管一万余千本を駆使して世界最初のコンピュータがこの地球上に誕生して以来、高度資本主義社会の成熟によるニーズの多様化と、その後の半導体技術の急速な進歩に支えられて、より高速で大容量なものへと

変身し、初期の単なる電子式計算機から、ワープロや各種制御装置、通信装置、さらにはその人工知能化によって種々の経営システムを管理・構築する装置へと着実にその裾野を広げてきた。

そして今、パーソナルコンピュータの飛躍的な性能向上・低価格化、通信回線の高速化・大容量化によって、コンピュータシステムは一極集中処理システムから分散処理システムへ、また限定的・閉鎖的システム

からグローバルな開放的システムへとその対象を大きく広げようとしている。

その結果、複数のコンピュータを接続し、データベースに蓄積された情報を互いに共有・構築しあい、またこれを利用することにより、我々はその求める多種多様な情報をリアルタイムに入手することはもちろん、積極的にこれに働きかけることにより、情報を特定または不特定多数の者に対して発信できるようになった。したがってコンピュータネットワークの発展は、我々の生活様式や労働環境、企業形態、さらには社会政策、国家政策に至るまで大きな影響を与えずにはおかない。このネットワークの対象は、限定的な集団（個人、グループ、企業、特定地域）から、より大きな集団へと広がりがつあり、

いつてみれば、特定の具体的な集団から不特定の抽象的な集団へと、企業や地域そして国家という既成概念を超えた超社会集団へとその対象を拡大していくであろうことは、今や必然である。

近年、マルチメディアという言葉が毎日のように新聞やテレビで報道される。そして今、変革の時代を乗り切るための二十一世紀に向けたキートクノロジー・情報インフラとして多くの期待を集め、国・地域をあ

げてこの計画に取り組もうとしているのは、周知の通りである。

そもそも、当初コンピュータにはメディアという概念は存在しなかった。最初にCRT（ブラウン管）が付いたのも単に操作性を向上させるためであり、それまでの煩わしいボタン、スイッチ操作からの解放を目的としたものに過ぎなかった。ところが、電子技術の飛躍的な発展は、コンピュータをより高速・大容量なものにし、画像処理、音声処理といった高度で複雑なソフトウェアの構築を可能とし、これらの処理機能を持ったマルチメディアパソコンが登場させた。そして光ファイバーや情報の高速・大量伝送を実現し、パケット通信方式等のソフトウェアを実用化した。このような背景のなかでコンピュータネットワークは、従来のテキストデータ（文字）対象から、画像、音声、図形等を含んだ、いわば人間が有する五感と同様の形態による情報を扱えるネットワークへと進化しつつあり、その飛躍的發展はとどまるところを知らない状況にある。

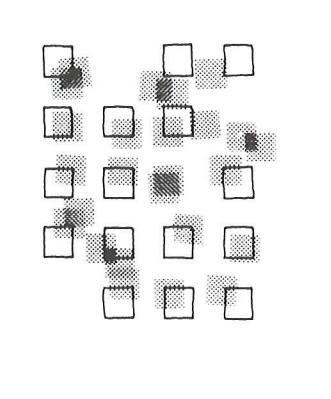
マルチメディアとは即ち、これらの総体をいうのであって、いつてみればコンピュータネットワークの機能面からの表現に過ぎない。したがってマルチメディアという言葉自体にはそれ以上の意味はないのであ

で、問題は、マルチメディアというものを真に価値あるものにするためにいかなる価値観・ポリシー、そしてシステム構想のもとに基本設計、詳細設計を構築いくかということにある。そして、ここにおいてこそ「ソフトウェア文化論」なるべきものを語るべき必要があるのではないか。

ではないかと思われる。そしてこの低さの背景には、その発展を阻害するさまざまな制度・慣習等の存在をあげることができよう。

ここで誤解のないように断っておくが、私自身、本来わが日本人に先天的にこれらの能力が劣っていると考えている者ではない。

よく、西洋の合理主義ということがいわれるが、コンピュータなどという機械はこれの最たるものであって、いうまでもなくその根底には主として欧米で発達してきた科学が存在する。明治維新以来、わが日本もこれらの恩恵をこうむってきたのはまぎれもない事実であり、その効用は多大なるものがあつたし、今後もあり続けるであろう。

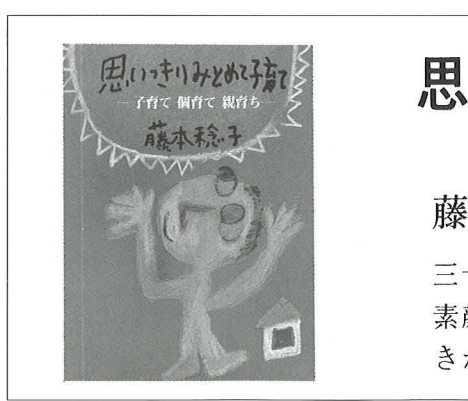


しかしながら、ここに至って西洋的文明のゆきづまりということが言われるに至り、二十一世紀は東洋の合理主義を根底の価値感とする人類社会の構築が必要であるとも言われはじめた。そこには、人類という生物の精神的崩壊の兆しからくる危機感の表れがあるのであって、我々がその存在における精神的支柱を見失いがちになっていることからくるものである。

思いつきりみとめて子育て
——子育て 個育て 親育ち——

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ園長がつづる素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働きかけをするなかで、どの子ども大きく伸びていく。



紫式部の造った男たち [III]

朱雀院と頭中将

藤田 加代



源氏物語には、とりわけ特徴的な二人の脇役が登場します。一人は源氏の兄である朱雀院、今一人は彼の最初の妻葵上の兄弟(通説では兄)に当たる頭中将です。いずれも主人公源氏の生涯に添い重なりつつ、彼に敗北し、彼の後塵を拝することを通して、興味津々の脇役になっていきます。

朱雀院は桐壺帝の第一皇子。母は右大臣家の姫で、弘徽殿太后。源氏物語を代表する謀略型の女性でした。幼くして立坊した朱雀は柔弱で凡庸、しかし善良かつ温和な人柄で、「強い母」の「気弱な息子」であり、摂関政治体制下での傀儡そのものの、無力で心優しい帝でありました。

朱雀の敗北の第一歩は、源氏が葵上と結婚し、左大臣家の婿になったことに始まります。東宮である第一皇子からの要請を袖にして、既に臣籍に降りていた第二皇子を婿にすることは容易ならざる不敬で、東宮の権威が土にまみれることですから、源氏は葵上との結婚によって、左大臣・右大臣両家の対立抗争に組み込まれるだけでなく、大袈裟に言えば、東宮に弓を引く者、という不穏な噂の火種にされる立場になったのです。

加えて朱雀の寵愛する朧月夜との密会が露見すると、源氏失脚を狙う弘徽殿太后の謀略によって、朱雀の名による源氏除名の処分がなされま

す。源氏謀反。源氏の「公」への犯し。囁かれる罪名はおどろおどろしいのですが、須磨流論という源氏の生涯最大の危機の前後にも、当の朱雀には弟への敵意も悪意もありません。桐壺院の遺志を守り得ず、源氏を苦境に追い込んだ自らの非力を嘆くばかりです。源氏的美質を愛で、須磨に落ちたその人の不在を悲しみ嘆き、あまつさえ、嫉妬や憎悪の代わりに、源氏と朧月夜とは愛を交わすに相応しい魅力的な男女だと、二人の仲を隠微に受容する帝でもあるのです。

敗北の構図は、前斎宮(六条御息所の姫)のことにしても、例外ではありませんでした。以前から前斎宮に好意を寄せ、入内を熱望していた朱雀の心中を知りながら、源氏は彼女を強引に冷泉帝(源氏の実子)の後宮に入れてしまいます。冷泉の御代の安泰と自己の権勢を固めるために、兄の愛を踏み躪った源氏に、従容として朱雀は敗北するのです。

このように、公私にわたって源氏

質に対して、「俗」そのもののリアリティがあります。劣る者を笑い捨て、権勢欲を露わにし、自己顕示に熱中する頭中将は、平安朝の官僚貴族の美と醜、魅力と嫌味を端的に示

しかしながら、翻って源氏物語第二部を見たとき、源氏晩年の悲劇が朱雀院によって結果的に仕組まれたことに呆然とするのは、私だけでしょうか。また、朱雀院と頭中将の子たちが、その悲劇の仕手になる構想をどう考えればよいのでしょうか。六条院源氏を汚辱にまみれさせ、その誇りを踏み躪る衝撃を与えたのが、他ならぬ朱雀院と頭中将の子たちである女三宮と柏木衛門督でした。そして、悲劇の根源である女三宮の六条院降嫁を懇望したのが、朱雀院その人だったのです。

勿論、朱雀院には何の作為もありません。そこには、源氏への賛嘆の念が、鍾愛の姫宮の婿選びと短絡的に結びついた切ない「錯誤」があるばかりでした。しかし即位すること以外一度も源氏の優位に立てなかつた朱雀と、これまた、一度も源氏に勝つことのなかつた頭中将の、まるで無意識の復讐のような女三宮・柏木密通事件は、源氏に妻を寝取られた男の苦悩を経験させ、彼を人間不信に導く恐ろしい事件でした。

脇役が、脇役で終わらないことに慄然とさせられるのも、また源氏物語であるのです。(高知女子大学保育短期大学部教授)



若い日の友情のしからしむるところだったでしょう。しかし考えてみると、右大臣家の婿で、処世上手な頭中将は、須磨に源氏を訪ねて、しかも失脚を免れ得る、唯一の人物だったとも言えそうです。源氏が須磨から帰京し、政權の座に返り咲くと、両者の対立の図式が鮮明になります。秋好と弘徽殿女御の立后争い、夕霧・雲居雁の結婚問題等、ことごとくに源氏と対立し、すべて頭中将敗北のうちに和解除します。対立と敗北と和解を繰り返しながら、政界から葬られることもなく、常に源氏に一步遅れて官位昇進した頭中将は、一定の信頼と共存の枠内での源氏の対立者と言えるかもしれません。青年期は藤原隆家、壮年期は藤原公任をモデルにしたと言われる頭中将の造型は、源氏の人間離れた美

すものと言えましよう。源氏が世俗に生々しく生きるとき、対立と敗北と和解のスタンスで源氏に絡む頭中将の役割は決して小さくはないと思われま

に圧倒され、敗北者として描かれる朱雀院は、負け犬と評され、ただ源氏を引き立てるだけの脇役とも解されます。しかし作者は、朱雀と源氏とを対立の座標に置きつつ、朱雀自身にはおおよそ競争心や対立意識を付与しませんので、その力弱さや暗愚さが、引き立てられる源氏の力量を強調しつつ、一方で、涙ぐましいほどに善良な朱雀像を造りあげることにもなるのです。

一方頭中将は、常に源氏の後塵を拝しながら、恋敵として悪友として、後には政敵として生きる人物です。源氏の葵上との結婚と相前後して右大臣家の婿になった頭中将は、源氏物語初発の図式から言っても、源氏とは政敵になるべく位置づけられています。しかし父親たちの世代が現役で、彼等が義兄弟として親友として青春を謳歌できた時期は、彼等は学芸を競い、女性を張り合い、しかも常に源氏には決して勝てない役柄で、頭中将は源氏を引き立て続けていたのです。

『無名草子』という中世の書物で、弘徽殿太后などの不興をかってまで、源氏を須磨に訪問した頭中将の友達甲斐と男気を褒めています。確かに、

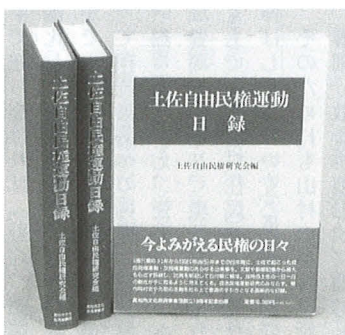
高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動 日録

土佐自由民権研究会編

B5判・上製本・函入り 496頁

定価10,000円(税込)



苦悩する現代山村 (6)

—その再生をめぐる—

大野 晃

スギ・ヒノキの人口林型山村に特質づけられた現代山村の「危機」は、針葉樹偏重の植林政策と外材依存政策とによるわが国の林業政策がもたらした矛盾から帰結されたものである。そして、その根底には農工商格差を拡大し、構造的な地域間格差を生んできたところのわが国の産業構造それ自体が内包する矛盾にその危機が起因していること、これが、現代山村をとらえる基本的視点であることを冒頭で述べておいた。

「苦悩する現代山村」を結ぶにあたり、病める現代山村の（人間と自然）の貧困化を止揚し、（人間と自然）の豊かさを創造していく場としての山村をどう再生したらよいか、その具体策と方向性を述べておく。

周知のように農林漁業は、工業生産とはちがう「生物」生産という特殊性を持った産業である。このため経済的、社会・文化的、自然環境保全的諸側面が離れがたく一体化している「総合的産業」である。この産業のもつ総合性をふまえた視点の欠

落が生産至上主義を生み環境の論理を退けてきたのである。スギの単層林化による森林モノカルチャーは、まさにこの経済効率至上主義の象徴であり、その結果が「沈黙の林」をつくり出したのである。また、生産性の低い棚田の放棄も経済効率至上主義が生んだものに他ならない。棚田の多い山間部の集落が限界集落化し、田畑へのスギの植林が進み耕作放棄地が増大すれば、棚田の生産機能だけでなく、山の保水力や水の管理機能などが著しく低下することになる。したがって、農地を農地として維持し棚田を放棄することなく耕作し続けること、それ自体が山の「貯水池」を維持することになり、網の目のように張りめぐらされている用水路を補修することによって水の管理機能の低下を防ぐという環境保全上重要な役割をこの棚田は果たしている。

ながっており、両者は離れがたく一体化した存在である。それゆえ、こうした事実認識に立ち、農林業のもつ経済的側面としての地域生産力の展開を政策課題にのせるだけでなく、農林業のもつ環境的側面をも政策課題にのせるような両者の統一の視点からの政策展開を考へることが必要であり、山村の社会的現実そのものがその必要性をわれわれに要請している。

他方、自分たちの地域を自分たちの手で守らなければ「むら」が限界集落化し、崩壊するという危機感のなかで山村の住民は、創意と工夫によって存続集落への再生に取り組んでいる。それゆえ、荒廃しつつある地域資源を管理し、環境を保全していく上でこの山村住民の主体的な芽を伸ばし支えていくことが必要である。そのためには山村の農林業対策は、零細分散な耕地形状に即応した小回りがきく「農民の寸法」に合った国の支援策が必要である。この点では、一昨年出された特定農山村法は概して山村の実状に即応したものになっておらず、山村住民の主体的芽を伸ばすための支援策とは程遠い内容になっており、住民からは実状に合った政策づくりが求められている。



第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

紙芝居 近藤輝代彦

『公認PC辞典』と称するアメリカの辞書がある。試みに「ふとつた・白人の妻」という三語を引いてみると、それぞれ「水平方向に試験をうけた」、「メラニン色素の欠乏した」、「無給セックス労働者」などと定義してある。

PC



風俗歳時記

「たんなる言葉の言い換えだけで、本当に差別や偏見をぬぐいさり、人権を守ることができるとは、いかに難しいことか。」と、この「公認PC辞典」(増補訂版)に続いて、昨年は「PCおとぎ話集」という同趣向のパロディ本が出た。同書はたちまちベストセラーの上位に上り、早くも日本で翻訳が出ている。「白雪姫」、「裸の王様」など誰もがよく知っている十二編のおとぎ話が、(新PC)風に再話される中で、人種性差、階級から墮胎、同性愛、菜食主義に至るさまざまな問題が戯画化されていて興味深い。

やや冗漫で辛辣さに欠けるが、これはあるが、「PC辞典」を援用・敷衍したユーモラスな言い回しや注記が読書大衆にうけたのであろう。

また、中東湾岸戦争があたりた愛国的ナショナリズムの高揚が、そのきわもの的人気の底に潜んでいるのかも知れない。(朴)

(朴)

「山を楽しむ」を第一に

宮本 和宣

「四国百名山」やNHKで現在放映されている深田久弥の「日本百名山」、中年の登山教室等で、中年の登山が静かなブームを呼んでいます。私たちが「しゃくなげ会」は十数名の典型的な中年の登山グループです。

山の好きな仲間が、職場にとらわれずおよそ二週間に一回の割合で、年中四国の山を中心に、全員が柿色と草色のバンドナを付け楽しんでいきます。

年に一回、五月の連休には西日本の山々（今年は九州の九重連山）に、八月にアルプス（今年後は立山連峰の鹿島槍ヶ岳）へ。



汗をかきかき苦勞して登った山頂では、輪になってビールで乾杯、一つ鍋の下の雑炊（ちよっと雑炊ならぬずーと雑炊）で、同じ釜の飯、を食べ、山の水のコーヒーで最低一時間の楽しい「宴会」。ま

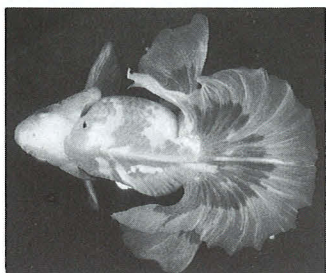
「トサキン」に魅せられて

黒原 幸成

この会は、昭和六十三年に発足し、今年で八年目を迎えました。現在当会員は県内県外合わせて四十三名です。遠くは広島県や宮崎県の会員もいます。品評会は、八月と十月の年二回開催しています。土佐錦魚は華麗な尾が最大の見せ所になっています。体に対し水平に尾が展開し左右が大きく前に袋状に反転します。他の金魚のように泳ぎはあまり得意ではありません。

このような土佐錦魚を創りだすには、当才魚（稚魚）の時は丸鉢といって直径六十cm深さ十六cm位のセメントの容器で数少なく飼育します。稚魚がふ化してから毎日が選別、餌やり、水の管理、一日たりとも目が放せません。

二才魚親魚になれば角鉢といって横六十cm縦九十cm深さ十三cm位の容器に二才魚なら二匹、五匹位、親魚で二匹、三匹位の匹数でえさはアカコ（イトミミズ）



モノクロ写真展

荒尾 哲夫

まず私達のグループを紹介します。グループの名称は「HAMAFOTOクラブ」全員モノクロ（カラーでなく白黒の）写真で祭り、行事のスナップ、風景、心象写真等の写真表現を楽しんでおります。



カラーフィルム誕生以前からのモノクロ表現にこだわってきた人、又白と黒での表現に神秘さを感じて始めた人など、月一回の集いに仲間の作品に心動かされる一枚を見つけ、その欲びがヒントとなって自分の写真表現の成長を促すことになり切磋琢磨し作品作りをしています。写した時の感動を一枚の印画紙でいかに表現するか、フィルム現像、プリント

散歩の途中で



秦小学校の北側、市道秦8号線と民家に挟まれた200坪程の湿地に蓮が密生しているのを見つけた。開花期が過ぎたのか、16弁の花がひとつだけ咲いている。古しえの秦の泉寺の地に蓮花今も咲く。などと勝手に楽しい想像を巡らしてみた。

風伯

ある点景

セピア色にくすんでしまった。坂本龍馬の銅像建設を記念して昭和三（一九二八）年に発行した冊子。それを私が所持しているのは、みずから便利屋と称した大野武夫さん（社会事業家）が、生前に私に下さったものである。いわば唯一の形身だ。あえて言わしてもらおうと、大野大人が存

在しなかったら、龍馬銅像は実現したかどうかかわらない。その根拠を示すには紙幅がないので何かの折に書くとして、とにかく大野大人の先見性と行動力は定評があった。しかし自己顕示欲はさらさらなかった。大野大人は記念号に「この日式典も一順済んだ午後三時半頃桂浜へ行った」と書いて

て、前後の時間帯を空白にしている。晴れがましい式典に出ずとも、裏方的な仕事を誰かがしないといけないから、その役を自分がしよう、と、まるで莊子のいう「無用の用」を果たしたようだ。一式典の日から二十年経った昭和二十三（一九四八）年、雑誌「なみ」にこう記している。「除幕式の当日、巡航船の船ぐりや自動車のあつせんなどの後方勤務に服していた。つまり浦戸棧橋で、参列者の便宜をはかって動き回り、三時半頃に弟の大野伊勢夫をつけて桂浜へ行き、式場の後片付けに余念がなかったという。誰かサンのように、龍馬銅像はオレが建てたといわんばかりに振る舞う輩とちがって、大野大人は「瞬間の選択で勝負」することを信条にして、無欲恬淡に生きた。「ウイウヒトニ キミモナロウヤ」（沌平）

さに至福の時を過ごします。趣味が昂じて鏡村に手作りの庵「しゃくなげ小屋」を作り、現在は工期に追われずゆつくりと開墾中。ともに旅をし、ともに寝、ともに食らい、一径一草の細に至るまでともに目をそそぐそんな山好きのグループです。どこかの山でお会いした時はよろしく。最後に、私たちのモットーは：街を歩けば、山を恋ひ 山に登れば、人を恋う

か人工飼料を一日三回朝夕与えます。並たいていの労力ではありません。土佐錦魚は飼育する人、場所、水替え、餌やりで魚の型が変わります。それほどむずかしく奥の深い金魚なのです。会員は日夜努力しすばらしい土佐錦魚を創り出しています。来る十月十五日（日）午前八時三十分から午後二時まで、高知大神宮にて品評会を催しますのでぜひ一度、天然記念物である土佐錦魚を観に来て下さい。

を自家処理し、失敗の連続の中から思いどおりの表現が出来た時の欲びはひとしおです。さて、私達のクラブ「HAMAFOTOクラブ」では発足以来一五年経ちました。クラブ員の日ごろの写真活動のなかで培ってきたモノクロだけの写真展を開催することにしました。ぜひ観においで下さい。

高知市文化振興事業団編 わがまち百景	A5判 二三四頁 定価 二、〇〇円
筒井広道著 画帳の歳月	A5変 二五六頁 定価 二、〇〇円
土居重俊・浜田数義編 高知県方言辞典	A5判 七三六頁 定価 六、一八〇円
高木啓夫著 土佐の芸能	B5変 三四六頁 定価 四、九四四円

高知市文化振興事業団編 高知のエスプリ	A5判 二六〇頁 定価 二、〇〇円
高知県緑の環境会議編 森林と林業の再生	A5判 一五二頁 定価 一、〇〇円
山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の生涯	四六判 二六八頁 定価 二、二〇〇円
依光 裕編著 珍聞土佐物語上下巻	四六判 三九二頁 四〇八頁 定価 一、六〇〇円
鈴木繁井本正人 関根猪一郎著 （高知レポート6） 協同組合と地域づくり	A5判 二二六頁 定価 一、〇〇円
清遠幸男著（高知レポート5） 高知県の工業	A5判 一二二頁 定価 一、〇〇円
外崎光広著 土佐自由民権運動史	A5判 四二四頁 定価 二、八〇〇円
外崎光広編 土佐自由民権資料集	A5判 三四四頁 定価 三、〇九〇円
今井嘉彦著（高知レポート2） 河川はよみがえるか	A5判 一〇八頁 定価 一、〇三〇円
岡村清水著 高知県文学散歩	四六判 二七八頁 定価 一、八〇〇円
高知の文化を考える会編 高知の文化を考える	A5判 一八八頁 定価 二、二〇〇円

文化セミナー'95

表面的には、私たちはゆたかな繁栄の時代を生きています。
 文明の進歩は、ストレス社会を助長させ
 人間の心の問題を増加させています。
 人は人と自然からどのような影響を受けることで、
 生命力を増減させているのでしょうか。
 人間の心の持つ不思議さや、
 自分とは、人間らしさとは何かについて探ります。

◇10月3日(火) 午後6時30分～ 講師：布施 英利 評論作家

『脳の中の美術館ーゴッホの脳、モネの目ー』

*美術を見ることから私たちの目や脳の働きを考えます。またこれは、逆に目や脳の働きから美術の新しい見方を考えるものでもあります。

◇10月16日(月) 午後6時30分～ 講師：上田 紀行 愛媛大学教養部助教授

『異世界体験が心を癒すースリランカの悪魔祓いに学ぶー』

*人間はどんなときに生きる元気をなくして病み、どのような場でいかに癒されるのか。私たちがいま最も欲しているもの、深い癒しについて考えます。

◇10月23日(月) 午後6時30分～ 講師：桑原 知子 姫路獨協大学一般教育部助教授

『もう一人の私ーほんとうの自分を求めてー』

*二重人格や二重身である「もう一人の私」に目を向けていくと、それまで思っていた「自分」がわからなくなってくる。自分とは何かを探ります。

会場は3日と16日は、高知共済会館3階ホール・23日は、高知グリーン会館2階会議室です。

参加費：各回500円 ーお申し込み、お問い合わせは文化振興事業団までー

生活セミナー高知塾

山の楽しみ 自分流

快適に 老年ライフ

9月19日 (火)	高知の森に 親しもう	講師 西村 武二氏 (高知大学農学部森林科学科助教授)	9月20日 (水)	老化と ライフスタイル	講師 松林 公蔵氏 (高知医科大学老年病科)
9月21日 (木)	ふだん着の 山歩き	講師 大森 義彦氏 (高知大学保健体育教授)	9月21日 (木)	こころのケア・ からだのケア	講師 石川 誠氏 (近森リハビリテーション病院長)
9月26日 (火)	登山道は 一つじゃない 一途なき道をゆく楽しみ	講師 山崎 啓一氏 (高知県山岳連盟理事)	9月27日 (水)	老人福祉サービスの じょうずな利用法と今後	講師 山本 恵子氏 (健康生きがいづくりアドバイザー)
9月28日 (木)	四国の花より 自然をみる	講師 稲垣 典年氏 (高知県立牧野植物園技監)	9月29日 (金)	かしこい マネープラン	講師 大上 力氏 (高知銀行地域経済振興財団専務理事)

■時間 午後6時30分～8時30分

■時間 午後2時～4時

■会場 市民フロア (デンテッターミナルビル5階 TEL 85-2393)

※駐車場はありません。

■定員 いずれも40人 (定員になり次第締め切り)

■受講料 いずれも全4回で1,500円 (各回ごとの参加も可。1回400円)

■申し込み方法 電話かハガキ (住所・氏名・電話番号・参加希望日を明記) で事業団まで。